

Bibliographic Information

Synergistic agrochemical fungicidal compositions for controlling powdery mildew. Yanase, Yuji; Yoshikawa, Yukihiro; Kawashima, Hideo; Takashi, Atsuo; Akase, Tomohisa. (Mitsui Chemicals Inc., Japan). Jpn. Kokai Tokkyo Koho (2001), 8 pp. CODEN: JKXXAF JP 2001072507 A2 20010321 Patent written in Japanese. Application: JP 99-249395 19990903. CAN 134:233062 AN 2001:191977 CAPLUS (Copyright 2004 ACS on SciFinder (R))

Patent Family Information

<u>Patent No.</u>	<u>Kind</u>	<u>Date</u>	<u>Application No.</u>	<u>Date</u>
JP 2001072507	A2	20010321	JP 1999-249395	19990903

Priority Application

JP 1999-249395	19990903
----------------	----------

Abstract

Title compns. contain 2-RC₆H₄NHCOAr [R = C₃-12 linear or branched (halo)alkyl, C₃-10 linear or branched (halo)alkenyl, (C₁-4 alkyl-substituted) C₃-10 (halo)cycloalkyl, (un)substituted Ph; Ar = 2-substituted Ph, substituted heterocyclyl] and triazoles, imidazoles, morpholines, benzimidazoles, anilinopyrimidines, acrylates, iminotadine albesilate, and/or polyoxin. Thus, application of 5 ppm N-[2-(1,3-dimethylbutyl)anilino]-2-methyl-4-trifluoromethylthiazole-5-carboxamide and 10 ppm thiophanate Me showed synergistic antifungal effect on *Sphaerotheca fuliginea*.

THIS PAGE BLANK (USPTO)

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号
特開2001-72507
(P2001-72507A)

(43) 公開日 平成13年3月21日 (2001.3.21)

(51) Int.Cl. ⁷	識別記号	F I	テマコード (参考)
A 0 1 N 37/22	1 0 1	A 0 1 N 37/22	1 0 1 4 H 0 1 1
37/06		37/06	
43/08		43/08	A
43/10		43/10	B
43/40	1 0 1	43/40	1 0 1 A
審査請求 未請求 請求項の数 7 O L (全 8 頁) 最終頁に続く			

(21) 出願番号 特願平11-249395

(22) 出願日 平成11年9月3日 (1999.9.3)

(71) 出願人 000005887

三井化学株式会社

東京都千代田区霞が関三丁目2番5号

(72) 発明者 柳瀬 勇次

千葉県茂原市東郷1144番地 三井化学株式
会社内

(72) 発明者 吉川 幸宏

千葉県茂原市東郷1144番地 三井化学株式
会社内

(72) 発明者 川島 秀雄

千葉県茂原市東郷1144番地 三井化学株式
会社内

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 植物病害防除剤組成物

(57) 【要約】

【課題】 うどんこ病に対して相乗的に増強された作用を有する植物病害防除剤組成物を提供する。

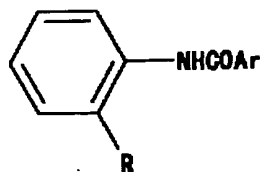
【解決手段】 成分 I の置換ベンゼン誘導体の一つと成分 II のトリアゾール系化合物、イミダゾール系化合物、モルフォリン系化合物、ベンズイミダゾール系化合物、アニリノピリミジン系化合物、アクリレート系化合物、イミノクタジン・アルベシル酸塩、ポリオキシンのうちのひとつの少なくとも二種の有効成分を含有し、うどんこ病に対して相乗的に増強された作用を有する植物病害防除剤組成物。

【効果】 本発明の組成物を使用することにより、慣用の方法に比べて予期しない少量の有効成分量で、効果的に病害の防除ができる。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 少なくとも2種の有効成分を含有し、うどんこ病の感染に対して相乗効果を有する植物病害防除剤組成物であり、成分Iは一般式(1)(化1)

【化1】

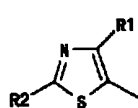


(I)

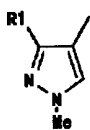
【式中、Rは炭素数3～12の直鎖または分岐のアルキル基、炭素数3～12の直鎖または分岐のハロゲンアルキル基、炭素数3～10の直鎖または分岐のアルケニル基、炭素数3～10の直鎖または分岐のハロゲンアルケニル基、炭素数1～4のアルキル基で置換していてもよ

い炭素数3～10のシクロアルキル基、炭素数1～4のアルキル基で置換していてもよい炭素数3～10のハロゲン置換シクロアルキル基、または1～3個の置換基により置換されていてもよいフェニル基であり、該フェニル基の置換基は水素原子、炭素数1～4のアルキル基、炭素数2～4のアルケニル基、炭素数2～4のアルキニル基、炭素数3～6のシクロアルキル基、炭素数1～4のアルコキシ基、炭素数1～4のハロゲンアルコキシ基、炭素数1～4のアルキルチオ基、炭素数1～4のアルキルスルホキシ基、炭素数1～4のアルキルスルホニル基、ハロゲン原子、シアノ基、炭素数2～4のアシル基、炭素数2～4のアルコキシカルボニル基、アミノ基、または炭素数1～3のアルキル基で置換されたアミノ基であり、Rと-NHCOArは互いに隣り合っており、Arは以下の(A1)から(A8)(化2)

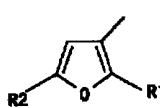
【化2】



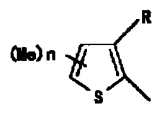
(A1)



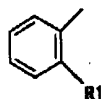
(A2)



(A3)



(A4)



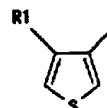
(A5)



(A6)



(A7)



(A8)

(式中、R1はトリフルオロメチル基、ジフルオロメチル基、メチル基、エチル基、塩素原子、臭素原子またはヨウ素原子であり、R2は水素原子、メチル基、トリフルオロメチル基またはアミノ基であり、nは0～2の整数である)で表される基である]で表される置換ベンゼン誘導体であり、成分IIはトリアゾール系化合物、イミダゾール系化合物、モルフォリン系化合物、ベンズイミダゾール系化合物、アニリノピリミジン系化合物、アクリレート系化合物、イミノクタジン・アルベシル酸塩、ポリオキシンのうちの少なくとも一つの化合物である組成物。

【請求項2】 成分Iにおいて、Rは炭素数5～8の直鎖または分岐のアルキル基、または炭素数1～4のアルキル基で置換していてもよい炭素数5～8のシクロアルキル基である請求項1記載の組成物。

【請求項3】 成分IIがベンズイミダゾール系化合物である請求項1又は2記載の組成物。

【請求項4】 ベンズイミダゾール系化合物がチオファネートメチルである請求項3記載の組成物。

【請求項5】 成分IIがアニリノピリミジン系化合物である請求項1又は2記載の組成物。

【請求項6】 アニリノピリミジン系化合物がメパニビ

リムである請求項5記載の組成物。

【請求項7】 成分IIがイミノクタジン・アルベシル酸塩である請求項1又は2記載の組成物。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、少なくとも2種の有効成分を含有し、うどんこ病の感染に対して相乗的に増強された効果を有する植物病害防除剤組成物である。更に詳しくは、有効成分の一方が植物病害防除作用を示す置換ベンゼン誘導体であり、他方がトリアゾール系化合物、イミダゾール系化合物、モルフォリン系化合物、ベンズイミダゾール系化合物、アニリノピリミジン系化合物、アクリレート系化合物、イミノクタジン・アルベシル酸塩、ポリオキシンから選ばれる化合物のうちの少なくとも一つを含有する殺菌剤組成物に関する。

【0002】

【従来の技術】近年開発された選択的作用を示す殺菌剤は、それまで使用されてきた非選択的な殺菌剤と異なり低薬量で安定した効果を示すが、繰り返し使用した場合に薬剤耐性が出現し、効力の低下を来す恐れがある。その対策として、予防的剤との混合、作用機作の異なる薬剤との混合、あるいは薬剤自身の使用回数の制限も行わ

れているとともに、新たな薬剤の開発が期待されている。

【0003】従来より植物病害を防除する目的で、数多くの薬剤が実用に供されている。すなわち、特開平6-199803号公報には、種々の置換ベンゼン誘導体が殺菌効果を有することが知られている。また、特開平10-251240号公報および特開平10-310577号公報には、本発明の成分Iの構造を有する置換ベンゼン誘導体が種々の病害に対して殺菌効果を有することが知られている。

【0004】一方、成分IIはトリアゾール系化合物、イミダゾール系化合物、モルフォリン系化合物、ベンズイミダゾール系化合物、アニリノピリミジン系化合物、アクリレート系化合物、イミノクタジン・アルベシル酸塩、ポリオキシシンから選ばれる公知の化合物であり、以下に一般名〔“商品名(英名)”、頁〕で示し、頁とは、〔ザ ペスチサイド マニュアル(The Pesticide Manual)、第11版、The British Crop Protection Council、1997年〕の記載頁を示す。

【0005】A. トリアゾール系化合物

1. プロピコナゾール〔“プロピコナゾール(Tilt)”、第1030~1032頁〕
2. トリアジメノール〔“バイタン(Baytan)”、第1218~1220頁〕
3. ペンコナゾール〔“トパス(Topas)”、第933~935頁〕
4. テブコナゾール〔“フォリキュラー(Folicur)”、第1144~1146頁〕
5. フルシラゾール〔“ナスター(Nustar)”、第1003~1004頁〕
6. ジニコナゾール〔“スミ-8(Sumi-8)”、第421~422頁〕
7. ブロムコナゾール〔“グラニット(Granit)”、第152~153頁〕
8. エボキシコナゾール〔“オープス(Opus)”、第79~80頁〕
9. ジフェノコナゾール〔“スコア(Score)”、第389~391頁〕
10. シプロコナゾール〔“アルト(Alto)”、第1003~1004頁〕
11. メトコナゾール〔“カランバ(Caramba)”、第803~804頁〕
12. ミクロブタニル〔“ミクロブタニル(Mylobutanil)”、第854~856頁〕
13. フェンブコナゾール〔“インダー(Indar)”、第508~509頁〕
14. ヘキサコナゾール〔“アンビル(Anvil)”、第674~675頁〕
15. フルキンコナゾール〔“カステラン(Caste

llan)”、第588~589頁〕

16. ビテルタノール〔“バイコール(Baycor)”、第131~133頁〕

【0006】B. イミダゾール系化合物

1. イマザリル〔“フンガフロール(Fungafloor)”、第691~693頁〕
2. プロクロラツ〔“スポルタック(Sportak)”、第1000~1002頁〕
3. トリフルミゾール〔“トリフミン(Triflume)”、第1245~1246頁〕

【0007】C. モルフォリン系化合物

1. フェンプロビモルフ〔“コーベル(Corbel)”、第528~529頁〕
2. トリデモルフ〔“カリキシ(Calixin)”、第1242~1243頁〕
3. ドデモルフ〔“メルタトックス(Meltatox)”、第449~451頁〕

【0008】D. ベンズイミダゾール系化合物

1. チオファネートメチル〔“トップジンM(Topsin M)”、第1201~1203頁〕
2. ベノミル〔“ベンレート(Benlate)”、第100~102頁〕
3. カルベンダジム〔“バビスチン(Bavistin)”、第182~184頁〕
4. チアベンダゾール〔“メルテクト(Mertect)”、第1183~1185頁〕

【0009】E. アニリノピリミジン系化合物

1. ピリメタニル〔“スカーラ(Scala)”、第1068~1069頁〕
2. メバニピリム〔“フルピカ(Frupica)”、第784~785頁〕
3. シプロジニル〔“ユニックス(Unix)”、第319~321頁〕

【0010】F. アクリレート系化合物

1. クレソキシム・メチル〔“ストロビー”、第743~744頁〕
2. アゾキシストロビルリン〔“ヘリテージ(Heritage)”、第70~72頁〕
3. 特開昭63-23852号公報に記載の化合物
4. SSF-126(コード番号)〔第1114~1115頁〕

【0011】G. その他

1. ポリオキシシン〔“ポリオキシシンAL(Polyoxin AL)”、第991~994頁〕
2. ノニルフェノールスルホン酸銅〔“ヨネボン(Yonepon)”〕
3. DBEDC〔“サンヨール(Sanyol)”〕
4. イミノクタジン・アルベシル酸塩〔“ベルクート(Bellkute)”、第709~712頁〕
5. トリフォリン〔“サブロー(Saprool)”、

第1252~1254頁]

6. フェナリモル [“ルビゲン (Rubigan)”、第505~506頁]

7. ヌアリモル [“トリミダール (Trimidal)”、第889~890頁]

8. ピリフェノックス [“ドラド (Dorado)”、第1066~1068頁]

9. フェンプロビジン [“ターン (Tern)”、第526~527頁]

10. キノメチオネート [“モレストン (Morestan)”、第198~200頁]

11. イオウ [“コサン (Cosan)”、第1133~1134頁]

12. フェノキシフェン [“(Quinoxifen)”、第1083~1084頁]

【0012】

【発明が解決しようとする課題】本発明は、成分Iの置換ベンゼン誘導体の一つと成分IIのトリアゾール系化合物、イミダゾール系化合物、モルフォリン系化合物、ベンズイミダゾール系化合物、アニリノピリミジン系化合物、アクリレート系化合物、イミノクタジン・アルベシル酸塩、ポリオキシンのうちのひとつの少なくとも二種の有効成分を含有し、うどんこ病に対して相乗的に増強された作用を有する植物病害防除剤組成物を提供することを目的とする。

【0013】

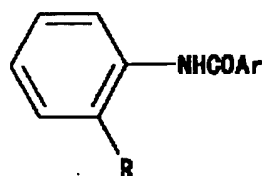
【課題を解決するための手段】本発明者等は上記課題を解決するため種々検討した結果、驚くべきことに、成分IIのトリアゾール系化合物、イミダゾール系化合物、モルフォリン系化合物、ベンズイミダゾール系化合物、アニリノピリミジン系化合物、アクリレート系化合物、イミノクタジン・アルベシル酸塩、ポリオキシンのうちのすくなくとも一つの成分と成分Iの置換ベンゼン誘導体の一つとを混合した組成物が、広範囲の植物病害、特にうどんこ病の病害の感染に対して増強された相乗効果を示し、従って前記課題の解決にかなうものであること

を見出し、本発明を完成した。

【0014】即ち、本発明は、少なくとも二種の有効成分を含有し、うどんこ病の感染に対して相乗効果を有する植物保護組成物であり、成分Iは一般式(1)(化3)

【0015】

【化3】

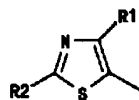


(I)

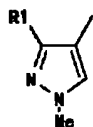
【式中、Rは炭素数3~12の直鎖または分岐のアルキル基、炭素数3~12の直鎖または分岐のハロゲノアルキル基、炭素数3~10の直鎖または分岐のアルケニル基、炭素数3~10の直鎖または分岐のハロゲノアルケニル基、炭素数1~4のアルキル基で置換していてもよい炭素数3~10のシクロアルキル基、炭素数1~4のアルキル基で置換していてもよい炭素数3~10のハロゲノ置換シクロアルキル基、または1~3個の置換基により置換されていてもよいフェニル基であり、該フェニル基の置換基は水素原子、炭素数1~4のアルキル基、炭素数2~4のアルケニル基、炭素数2~4のアルキニル基、炭素数3~6のシクロアルキル基、炭素数1~4のアルコキシ基、炭素数1~4のハロゲノアルコキシ基、炭素数1~4のアルキルチオ基、炭素数1~4のアルキルスルホキシ基、炭素数1~4のアルキルスルホニル基、ハロゲン原子、シアノ基、炭素数2~4のアシル基、炭素数2~4のアルコキシカルボニル基、アミノ基、または炭素数1~3のアルキル基で置換されたアミノ基であり、Rと-NHCOArは互いに隣り合っており、Arは以下の(A1)から(A8)(化4)

【0016】

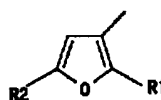
【化4】



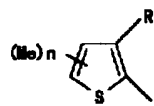
(A1)



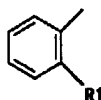
(A2)



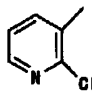
(A3)



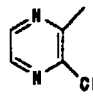
(A4)



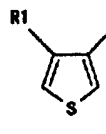
(A5)



(A6)



(A7)



(A8)

(式中、R1はトリフルオロメチル基、ジフルオロメチル基、メチル基、エチル基、塩素原子、臭素原子または

ヨウ素原子であり、R2は水素原子、メチル基、トリフルオロメチル基またはアミノ基であり、nは0~2の整

数である) で表される基である] で表される置換ベンゼン誘導体であり、成分 I はトリアゾール系化合物、イミダゾール系化合物、モルフォリン系化合物、ペンゾイミダゾール系化合物、アニリノピリミジン系化合物、アクリレート系化合物、イミノクタジン・アルベシル酸塩、ポリオキシンのうちの少なくとも一つの化合物である組成物に関する。

【0017】

【発明の実施の形態】本発明の成分 I で表される化合物のうち、好ましいものは、Ar が (A1) で、R1 が CF₃ または Me 基であり R2 が Me 基；Ar が (A2) で、R1 が CF₃ または CHF₂；Ar が (A3) で、R1 が Me 基であり R2 は水素原子または Me 基；Ar が (A4) で、R1 が Me 基であり n が 0~1 である化合物、R が炭素数 4~8 の直鎖または分岐のアルキル基、または炭素数 1~4 のアルキル基で置換していてもよい炭素数 4~8 のシクロアルキル基で表される化合物である。

【0018】本発明の成分 I として特に好ましい化合物は、Ar が (A1) で、R1 が CF₃ または Me 基であり R2 が Me 基；Ar が (A2) であり、R1 が CF₃ または CHF₂ であり、R が炭素数 4~8 の直鎖または分岐のアルキル基、または炭素数 1~4 のアルキル基で置換していてもよい炭素数 4~8 のシクロアルキル基である化合物である。

【0019】以下に、成分 I で表される化合物の具体例の幾つかを示す。

化合物番号 1 : N- {2- (1, 3-ジメチルブチル) アニリノ} -2-メチル-4-トリフルオロメチルチアゾール-5-カルボン酸アミド [R が 1, 3-ジメチルブチル基であり、Ar が A1 (R1=CF₃、R2=Me) の場合]

化合物番号 2 : N- {2- (1, 3-ジメチルブチル) アニリノ} -1-メチル-3-トリフルオロメチルピラゾール-4-カルボン酸アミド [R が 1, 3-ジメチルブチル基であり、Ar が A2 (R1=CF₃) の場合]

化合物番号 3 : N- {2- (1, 3-ジメチルブチル) アニリノ} -2-メチルフラン-3-カルボン酸アミド [R が 1, 3-ジメチルブチル基であり、Ar が A3 (R1=Me、R2=H) の場合]

化合物番号 4 : N- {2- (1, 3-ジメチルブチル) アニリノ} -3-メチルチオフェン-2-カルボン酸アミド [R が 1, 3-ジメチルブチル基であり、Ar が A4 (R1=Me、n=0) の場合]

【0020】本発明の組成物は、下記の種類の植物病害に対して有効である：イネのいもち病 (*Pyricularia oryzae*)、紋枯病 (*Rhizoctonia solani*)、ごま葉枯病 (*Cochliobolus miyabeanus*)、馬鹿苗病 (*Gibberella fujikuroi*)；ムギ類のうどんこ病 (*Erysiphe graminis* f. sp. *hord*

ei; f. sp. *tritici*)、さび病 (*Puccinia striiformis*; *P. graminis*; *P. recondita*; *P. hordei*)、斑葉病 (*Pyrenophora graminea*)、網斑病 (*Pyrenophora teres*)、赤かび病 (*Gibberella zeae*)、雪腐病 (*Typhula* sp.; *Micronectria nivalis*)、裸黒穂病 (*Ustilago tritici*; *U. nud a*)、なまぐさ黒穂病 (*Tilletia caries*)、眼紋病 (*Pseudocercospora herpotrichoides*)、株腐病 (*Rhizoctonia cerealis*)、雲形病 (*Rhynchosporium secalis*)、葉枯病 (*Septoria tritici*)、ふ枯病 (*Leptosphaeria nodorum*)；インゲン、キュウリ、トマト、イチゴ、ブドウ、ジャガイモ、ダイズ、キャベツ、ナス、レタス等の灰色かび病 (*Botrytis cinerea*)；ブドウのべと病 (*Plasmopora viticola*)、さび病 (*Phakopsora ampelopsidis*)、うどんこ病 (*Uncinula necator*)、黒とう病 (*Elsinoe ampelina*)、晩腐病 (*Glomerella cingulata*)；リンゴのうどんこ病 (*Podosphaera leucotricha*)、黒星病 (*Venturia inaequalis*)、斑点落葉病 (*Alternaria mali*)、赤星病 (*Gymnosporangium yamadae*)、モニリア病 (*Sclerotinia mali*)、腐らん病 (*Valsa mali*)；ナシの黒斑病 (*Alternaria kiku-chiana*)、黒星病 (*Venturia nashicola*)、赤星病 (*Gymnosporangium haraeanaum*)、輪紋病 (*Physalospora piricola*)；モモの灰星病 (*Sclerotinia cinerea*)、黒星病 (*Cladosporium carpophilum*)、フオモプシス腐敗病 (*Phomopsis* sp.)；カキの炭そ病 (*Gloeosporium kaki*)、落葉病 (*Cercospora kaki*; *Mycosphaerella nawae*)、うどんこ病 (*Phyllactinia kakikora*)；キュウリのべと病 (*Pseudoperonospora cubensis*)、ウリ類のうどんこ病 (*Sphaerotheca fuliginea*)、炭そ病 (*Colletotrichum lagenarium*)、つる枯病 (*Mycosphaerella melonis*)；トマトの輪紋病 (*Alternaria solani*)、葉かび病 (*Cladosporium fulvum*)、疫病 (*Phytophthora infestans*)；ナスのうどんこ病 (*Erysiphe cichoracearum*)、すすかび病 (*Mycovellosiella natarassii*)；アブラナ科野菜の黒斑病 (*Alternaria japonica*)、白斑病 (*Cercospora brassicae*)；ネギのさび病 (*Puccinia allii*)、黒斑病 (*Alternaria porri*)；ダイズの紫斑病 (*Cercospora kikuchii*)、黒とう病 (*Elsinoe glycines*)、黒点病 (*Diaporthe phaseololium*)；インゲンの炭そ病 (*Colletotrichum lindemuthianum*)；ラッカセイの黒渋病 (*Mycosphaerella personatum*)、褐斑病 (*Cercospora arachidicola*)；エンドウのうどんこ病 (*Erysiphe pisi*)、べと病 (*Peronospora pisi*)；ジャガイモの夏疫病 (*Alternaria solani*)、黒あざ病 (*Rhizoctonia solani*)、疫病 (*Phytophthora infestans*)；ソラマメのべと病 (*Peronospora viciae*)、疫病 (*Phytophthora nicotianae*)；チャの網もち病 (*Exobasidium reticulatum*)、白星病 (*Elsinoe leucospila*)、炭そ病 (*Colletotrichum theae-sinensis*)；タバコの赤星病 (*Alternaria longipes*)、うどんこ病 (*Erysiphe cichoracearum*)、炭そ病 (*Colletotrichum tabacum*)、疫病 (*Phytophthora parasitica*)；テンサイの褐斑病 (*Cercospora beticola*)；バラの

黒星病(*Diplocarpon rosae*)、うどんこ病(*Sphaerotheca pannosa*)、疫病(*Phytophthora megasperma*)；キクの褐斑病(*Septoria chrysanthemi-indici*)、白さび病(*Puccinia horiana*)；イチゴのうどんこ病(*Sphaerotheca humuli*)、疫病(*Phytophthora nicotianae*)；インゲン、キュウリ、トマト、イチゴ、ブドウ、ジャガイモ、ダイズ、キャベツ、ナス、レタス等の菌核病(*Sclerotinia sclerotiorum*)；カンキツの黒点病(*Diaporthe citri*)；ニンジン黒葉枯病(*Alternaria dauci*)等。なかでも、うどんこ病に対して相乗的に増強された効果を有する。このような増強作用は、個々の有効成分の作用の合計からは予期されることではなかった。

【0021】本発明の組成物において、成分Iの置換チオフェン誘導体と成分IIの混合割合は特に限定されないが、通常、成分Iの化合物1重量部に対して成分IIの化合物は0.01～50重量部、好ましくは0.5～50重量部、より好ましくは0.5～30重量部、より一層好ましくは1～20重量部の範囲内である。

【0022】本組成物は、2種の有効成分を含む混合物を直接施用しても良いし、個々の有効成分を別々に同時施用するか、または相前後して施用しても良い。更に、有効成分を含む混合物は、2種の有効成分を含む濃厚組成物を水で希釈しても良いし、また、個々の有効成分を含む2種の濃厚液から使用時に混合物を調製し、これを水で希釈しても良い(タンクミックス法)。本発明組成物を植物病害防除剤として使用する場合は、処理する植物に対して原体をそのまま使用してもよいが、一般には不活性な液体担体、固体担体、界面活性剤と混合し、通常用いられる製剤形態である粉剤、水和剤、フロアブル剤、乳剤、粒剤およびその他の一般に慣用される形態の製剤として使用される。更に製剤上必要ならば補助剤を添加することもできる。

【0023】ここでいう担体とは、処理すべき部位への有効成分の到達を助け、また有効成分化合物の貯蔵、輸送、取扱いを容易にするために配合される合成または天然の無機または有機物質を意味する。担体としては、通常農園芸用薬剤に使用されるものであるならば固体または液体のいずれでも使用でき、特定のものに限定されるものではない。

【0024】例えば、固体担体としては、モンモリロナイト、カオリナイト等の粘土類；珪藻土、白土、タルク、パーミキュライト、石膏、炭酸カルシウム、シリカゲル、硫酸等の無機物質；大豆粉、鋸屑、小麦粉等の植物性有機物質および尿素等が挙げられる。物性を改良するために、高分散ケイ酸または高分散吸収性ポリマーを添加することも可能である。液体担体としては、トルエン、キシレン、クメン等の芳香族炭化水素類；クロシン、鉱油などのパラフィン系炭化水素類；アセトン、メチルエチルケトン、シクロヘキサノンなどのケトン類；ジオキサン、ジエチレングリコールジメチルエーテルな

どのエーテル類；メタノール、エタノール、プロパノール、エチレングリコールなどのアルコール類；ジメチルホルムアミド、ジメチルスルホキシドなどの非プロトン性溶媒および水等が挙げられる。

【0025】更に、製剤の剤型、適用場面等を考慮して目的に応じてそれぞれ単独に、または組み合わせて次の様な補助剤を添加することができる。補助剤としては、通常使用される界面活性剤、結合剤(例えば、リグニンスルホン酸、アルギン酸、ポリビニルアルコール、アラビアゴム、CMCナトリウム等)、安定剤(例えば、酸化防止用としてフェノール系化合物、チオール系化合物または高級脂肪酸エステル等を用いたり、pH調整剤として磷酸塩を用いたり、時に光安定剤も用いる)等を必要に応じて単独または組み合わせて使用できる。更に場合によっては防菌防黴のために工業用殺菌剤、防菌防黴剤などを添加することもできる。

【0026】補助剤について更に詳しく述べる。補助剤としては乳化、分散、拡張、湿潤、結合、安定化等の目的ではリグニンスルホン酸塩、アルキルベンゼンスルホン酸塩、アルキル硫酸エステル塩、ポリオキシアルキレンアルキル硫酸塩、ポリオキシアルキレンアルキルリン酸エステル塩等のアニオン性界面活性剤；ポリオキシアルキレンアルキルエーテル、ポリオキシアルキレンアルキルアリアルエーテル、ポリオキシアルキレンアルキルアミン、ポリオキシアルキレンアルキルアミド、ポリオキシアルキレンアルキルアミド、ポリオキシアルキレンアルキルチオエーテル、ポリオキシアルキレン脂肪酸エステル、グリセリン脂肪酸エステル、ソルビタン脂肪酸エステル、ポリオキシアルキレンソルビタン脂肪酸エステル、ポリオキシプロピレンポリオキシエチレンブロックポリマー等の非イオン性界面活性剤；ステアリン酸カルシウム、ワックス等の滑剤；イソプロピルヒドロジェンホスフェート等の安定剤；ホスファチジルエタノールアミン、ホスファチジルセリン、ホスファチジルグリセロール、リゾレシチン等のセファリンまたはレシチン系の天然または合成リン脂質；その他メチルセルロース、カルボキシメチルセルロース、カゼイン、アラビアゴム等が挙げられる。しかし、これらの成分は以上のものに限定されるものではない。

【0027】本発明組成物における有効成分組成物の含有量は、製剤形態によっても異なるが、通常粉剤では0.1～30重量%、水和剤では0.1～80重量%、粒剤では0.5～20重量%、乳剤では2～50重量%、フロアブル製剤では1～50重量%、ドライフロアブル製剤では1～80重量%であり、好ましくは、粉剤では0.5～10重量%、水和剤では5～60重量%、乳剤では5～20重量%、フロアブル製剤では5～50重量%およびドライフロアブル製剤では5～50重量%である。補助剤の含有量は0～80重量%であり、担体の含有量は100重量%から有効成分化合物のおよび補

助剤の含有量を差し引いた量である。

【0028】本発明組成物の施用方法としては種子処理、茎葉散布、土壌灌注等が挙げられるが、通常業者が利用するの様な施用方法にても十分な効力を発揮する。施用量および施用濃度は対象作物、対象病害、病害の発生程度、化合物の剤型、施用方法および各種環境条件等によって変動するが、散布する場合には有効成分量としてヘクタール当たり50～1,000gが適当であり、望ましくはヘクタール当たり100～500gである。また水和剤、フロアブル剤または乳剤を水で希釈して散布する場合、その希釈倍率は200～20,000倍が適当であり、望ましくは500～5,000倍である。また、種子消毒の場合、殺菌剤混合物の使用量は、種子1kg当たり0.001から50g、好ましくは0.01から10gである。本発明の組成物は他の殺菌剤、殺虫剤、殺ダニ剤、殺線虫剤、除草剤および植物成長調節剤等の農薬、土壌改良剤または肥効物質との混合使用は勿論のこと、これらとの混合製剤も可能である。

【0029】次に、製剤例および試験例にて本発明を更に詳しく説明する。尚、製剤例中の部は重量部を表す。

【0030】

【実施例】製剤例 1 (水和剤)

化合物番号2:10部、チオファネートメチル:20部、リグニンスルホン酸ナトリウム:10部、アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム:20部および珪藻土:40部を粉碎混合して、水和剤を得た。

【0031】製剤例 2 (フロアブル剤)

化合物番号2:10部、メバニピリム:10部、プロピレングリコール:3部、リグニンスルホン酸ナトリウム:2部、ジオクチルスルホサキシネートナトリウム塩:1部、および水:74部をサンドグラインダーで湿

式粉碎しフロアブル剤を得た。

【0032】製剤例 3 (フロアブル剤)

化合物番号2:10部、イミノクタジン・アルベシル酸塩:20部、ポリオキシエチレンソルビタンモノオレート:3部、カルボキシメチルセルロース:3部および水:64部をサンドグラインダーで湿式粉碎しフロアブル剤を得た。

【0033】試験例1 キュウリうどんこ病防除試験

温室内で直径7.5cmのプラスチックポットに1.5葉期まで2本ずつ生育させたキュウリ(品種:相模半白)に、製剤例3に準じて調製した水和剤を所定濃度(有効成分濃度200ppm)に希釈して、3ポット当たり50mlずつ散布した。薬液が乾いた後、少量の展着剤を加えた水にキュウリうどんこ病分生胞子を懸濁して調製した分生胞子懸濁液(1×10⁶個/ml)を噴霧接種し温室内に7日間保った。接種7日後、キュウリ1葉あたりにうどんこ病の病斑が占める面積を次の指標に従って調査して発病度を求め、下記の式に従って防除価を算出した。結果を第1表(表1)に示す。

【0034】

発病度

0:発病なし

1:病斑の面積が5%以下

2:病斑の面積が5～25%

3:病斑の面積が25～50%

4:病斑の面積が50%以上

各処理区および無処理区の平均値を発病度とした。

防除価(%)=(1-処理区の発病度/無処理区の発病度)×100

【0035】

【表1】

第1表 キュウリうどんこ病予防効果

供試薬剤組成 化合物番号	有効成分濃度(ppm)	防除価
1	50 5	100 58
2	50 5	100 65

チオファネートメチル	200	10
チオファネートメチル	10	2
1+チオファネートメチル	5+10	75
2+チオファネートメチル	5+10	80
メパニピリム	5	20
2+メパニピリム	5+5	85
イミノクタジン・ アルベシル酸塩	5	35
2+イミノクタジン・ アルベシル酸塩	5+5	88

【0036】

【発明の効果】本発明は、少なくとも2種の有効成分を含む植物病害防除剤組成物であり、広範囲の植物病害、特にうどんこ病に対して相乗的に増強された効果を示すことから、植物病害防除剤組成物として有用である。本

発明の組成物を使用することにより、慣用の方法に比べて予期しない少量の有効成分で、効果的に病害の防除ができる。また、本発明の組成物はうどんこ病に対する相乗効果のほか、灰色かび病、赤さび病等に対する効果も示す。

フロントページの続き

(51)Int. Cl. 7

識別記号

F I

ターマコード (参考)

A O 1 N 43/54
43/56

A O 1 N 43/54
43/56

D
B
G

43/60
43/647
43/78

43/60
43/647
43/78

B
D

(72)発明者 貴志 淳郎

千葉県茂原市東郷1144番地 三井化学株式
会社内

(72)発明者 明瀬 智久

千葉県茂原市東郷1144番地 三井化学株式
会社内

F ターム (参考) 4H011 AA01 AA03 BA02 BA04 BA05
BA06 BB06 BB08 BB09 BB10
BB11 BB14 BC03 BC07 BC19
BC20 DA15 DC04 DE15 DH03
DH10